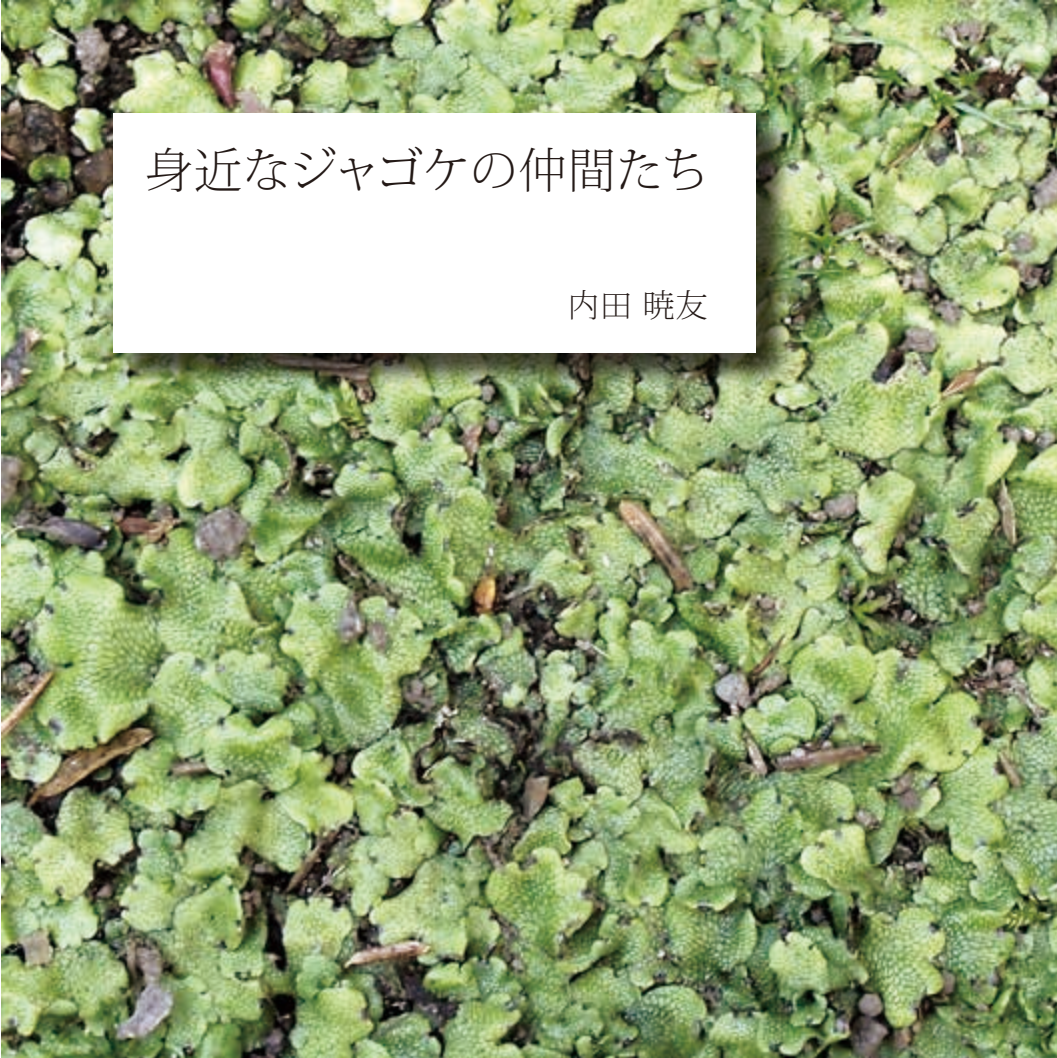


身近なジャゴケの仲間たち

内田 暁友



ジャゴケ (知床博物館前庭のイチイの下、2017年9月27日)



ヒメジャゴケの無性芽



ゼニゴケのカップ (無性芽器)

秋の始まりは为什么呢。暦の上での立秋、カツラの葉の甘い香り、それともヤマブドウの果実や秋味(サク)といった海山の幸でしょうか。斜里で生活していると季節の移ろいは様々な生物の営みに感じることができます。私はヒメジャゴケという路傍でみられるコケに円いツブ(無性芽)が付き始めるのにも秋の始まりを感じます。今回はゼニゴケ、そしてゼニゴケと生育地も見た目も似たジャゴケとヒメジャゴケを紹介します。ゼニゴケだと思っていたコケも案外ジャゴケやヒメジャゴケかもしれませんよ。

基本のゼニゴケ

身近なコケの代表としてよく紹介されるゼニゴケ。斜里でも家の周りや植木鉢のなか、ビニールハウスの周辺などでよく見かけます。ジャゴケやヒメジャゴケと違って直径2 mmほどのカップがついており、その中に無

性芽がたくさん入っています。円盤に切込みが2つ入った形の無性芽を鏡に見立てたのが名前の由来でしょう。身近なコケですが、光沢のせいか残念ながら評判は芳しくありません。

秋に探しやすくなるヒメジャゴケ

ゼニゴケよりも明るい色をしていることが多く、幅はゼニゴケの約半分。ゼニゴケ同様に家の周りなどでよく見られますがカップはなく、秋になると縁にたくさんの円盤状の無性芽をつけるのが特徴です。無性芽は大きいもので直径2 mmほど。無性芽で越冬し、本体は冬に枯れてしまいます。1784年、日本のコケとしては最も早く新種発表されましたが、なんと当時は地衣類の新種とされました。発表したのはリンネの弟子トゥーンベリ (CP Thunberg, 1743-1828) で、江戸時代、1775-76年の来日時に採集した標本が残されています。

匂い立つジャゴケ

ゼニゴケと比べて幅が2倍ほどあり、名前の由来である蛇の鱗のような模様がゼニゴケやヒメジャゴケより大きくて目立ち、カップも無性芽もありません。松茸のような匂いがあり、山から人里まで幅広い環境で見られます。特徴的で見分けやすい種だと考えられてきましたが、アロザイムや遺伝子を解析すると外見上非常に似た7種からなることがわかってきました。見た目からは人間に認識しにくい種を隠蔽種(いんぺいしゅ)と呼びますが、いくつかのジャゴケ隠蔽種はすでに和名もつけられています。これらの分布や形の違いについて、現在も研究が進められています。

発行 2017年9月28日
発行所 知床博物館協力会
099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49
斜里町立知床博物館内
TEL: 0152-23-1256 FAX: 0152-23-1257